

# 戦友

小川未明

青空文庫



目めの落おちくぼんだ、鼻はなの高たかい、小西こにし一とう等へい兵へいと、四角かくの顔かおをし  
 た、ひげの伸のびている岡田おかだ上じょう等とう兵へいは、草くさに身みを埋うめ腹はらばい  
 になつて話はなしをしていました。

見みわたすかぎり、草くさと灌木かんぼくの生はえ茂しげつた平原へいげんであります。  
 真まつ青さおな空そらは、奥底おくそこの知しれぬ深ふかさを有ゆうしていたし、遙はるかの地ちへい  
 平線せんには、砲煙ほうえんとも見みまがうような白しろい雲くもがのぞいでいまし  
 た。もう秋あきも更ふけているのに、この日ひの雲くもは、さながら、夏なつのあ  
 る日ひの午後ごごを思おもわせたのであります。

「故郷こきょうへ帰かえつたようだな。」

ときどき、思おもい出だしたように、あちらから、打うち出だす銃じゆう声せい

がきこえなかつたなら、戦地せんちにいると、忘れるわすくらいでした。

「いやに静しずかじやないか。」

「敵てきと相対あいたいしているという気きがしない。散歩さんぽにきて臥転ねころんで、話はなしているような気きがする。」

「見みたまえ、自然しぜんはきれいじやないか。あの花はなは、なんという花はなかな。」と、小西こにしが、いいました。

「おれは、草くさの名なというものをよく知しらないが、りんどうに似にていないのかな。」

岡田おかだは、そう答こたえて、自分じぶんもその地ち上じょうに咲さいている花はなに目めをとめました。すると、どこかで、細ほそ々ぼそと虫むしの鳴なく声こえがしたの

です。

小西は、頭を上げると、戦友の顔を見つめながら、

「僕が死んだら、帰還したとき、老母に言伝をしてくれないか

。」と、真剣な調子で、いいました。

「なに、おまえが戦死して、このおれが生きていたらというのか

。」

「そうなんだ。」

「おまえが死ねば、おれだって死ぬだろうに……、またどうして、

そんなことを考えたんだい。」

小西一等兵は、微笑しながら、

「僕は、画家なんだ。」

「そうか、画描きさんなのか。」

「ここへくれば、そんな職業のことなどはどうだつていいのだ。じつは、あれからもう二年たつが、いつも見慣れている、自分の住んでいた町の景色が、ばかに昨日今日、美しく見えるじやないか。それで、一枚描こうかと思つて、絵の具を買いに出かけて、帰つてみると召集令がきていたんだ。ああ、それであがついたよ。神さまが、一生かかつて観察するだけのものを一瞬間に見せてくださったのだと、ところが、今日僕にはこの野原の景色がたとえようなく美しく見えるのだ。空の色も、雲の姿も、また、この紫色の花も、虫の声までが、かつてこれほど僕を感激させたことはない。いまここにキャンバスがあるなら、

どんな色でも出し得るような気さえする。

しかし、これを描く、描かぬは問題でなからう。そして、この際むしろ、描くなんかということを考えないほうがいいのだ。

ただ、こうして、自然の裡にひたつていると、僕には、平時の十年にも、二十年にも優るような気がするのだ。いや、それよりも長い間、生活してきたように思える。それで、ふと戦死ということがあたまに浮かんだのだ。僕が、今日にも戦死したら、あとに残った老母に、ただ一言、僕が、勇敢に戦つて死んだといつて、告げてもらいたかつたのだ。僕の母親は、子供の時分から、僕を教 育するのに、いつも、いかなる場合でも、卑怯なまねをしてはならぬといいきかせたものだ。出征する朝も、神だ

なの前まえにすわつて、このことを繰くり返かえしていったのだ。今日きょうは野の原はらの景けしき色が、あまり美うつつしく見みえるので、ついこれからの激げき戦せんに花はなと散ちるのでないか、と思おもつたよ。」

だまつて聞きいていた、岡おか田だ上じ等よう兵とうは、あつはははと快かい活かつに笑わらつた。

「なにも心しん配ぱいするな。万まん一いつ、おれが、武ぶ運うんつたなく生いきて帰かえるとしたら、きつとお母かあさんに見みたままを言ことづつて伝つする。しかしなあこにし小西こにし、おれは、いつもこの隊たいにいるものは、生せい死しを一つひとつにすると思おもつているのだ。そうとしか考かんえられらない。どちらが先さきに、どちらが後あとに死しぬかわからぬが、おれも生いきて帰かえるとは考かんえていないぞ。」



「生死だけは、運命だからなあ。」

感じやすい、清らかな目つきをしている小西は、空を見上げて答えました。

この話が、わずか、三分間か、五分間にしか過ぎなかつたけれど、二人には、たいへんに長い時間を費やしたごとく思われました。

「君は、芸術家だが、おれは工場で働いていた職工なんだ。だからおれの口から人生観などと、しやれたことをいうのはおかしいが、人間の社会は、組み立てられた機械のようなものだと信じているのさ。」

「わかるような気がするよ。」

小西は、うなずきました。岡田は、言葉を つづけて、

「おれも、出征する十日ばかり前のことだった。平常からか

わいがついていたくりの木がある。秋になつておはぐろ色に実るの

を、楽しみにしていたのに、このごろたくさんありが上がつたり、

下がつたりして、とうとう枯れ枝をつくつてしまった。それで、

ありの上がれないようにと、綿で幹を巻いたのだ。最初はあり

のやつめ、綿に足をとられて、困つていたが、そのうちに平気で

それを乗り越えて下から上がつていくもの、上から、小粒な透き

とおる蜜液を抱いて下りてくるもの、綿の障害物などほと

んど問題でないのだ。おれは、しやくにさわつたから、熱湯

をわかつて、かけてやつたが、支那兵と同じくその数は無限なの

だ。そこはありのほうゆうかんが勇敢で、友の屍ともかばねの上うえを乗り越こえて、目も的てきに向むかって前進ぜんしんをつづけるといふうで、この無抵抗むていこうの抵抗ていこうには、こちらが、かえって根負けこんまをしてしまったよ。そのとき、感かんじたんだ。この小ちいさな虫むしですらが、種族しゅぞく全ぜん体たいの幸こうふ福くのためには、自じ分ぶんの死しをなんとも思おもわないこと、その有あり様さまを見みて、驚おどろかざるを得えなかつたのだ。」

「学まなぶべきことかもしれないな。」

「いや、大おおいに学まなぶべきことだよ。見みたまえ、こんなところにもありがあるじやないか。ほかの生せい物ぶつは生せい存ぞん競きやう争そうに滅ほろびても、協き力りよく生せい活かつをするありの種族しゅぞくだけは榮さかえるのだ、世せ界かいじゅうどこでも、ありのいないところはないだろう。」

「僕も、そんなことをなにかの本で見た覚えがある。」

「君が、花を見て考えていたときに、僕は、またありのごとく屍を乗り越えて、突進する自分の姿を空想していたのだな。それで、君が先に死んだら、おれは骨壺を負っていつてやるぞ。」

「どうか、そうしてくれ。」

突如として、このとき、耳をつんぎくような砲声が、間近でしました。短く、また長かった、二人の夢が破れたのです。

「前進。」

つづいて号令が、かかった。

終日、風の音と、雨の音と、まれに鳥の声しかなかった

平原が、たちまちの間に、草の木も根こそぎにされて、寸々にちぎられ、空へ吹き飛ばされるような大事件が持ち上がりました。大地をゆるがす砲車のきしりと、ビュン、ビュンと絶え間なく空中に尾を引くような銃弾の音と、あらしのごとくそばを過ぎて、いつしか遠ざかる馬蹄のひびきとで、平原の静寂は破られ、そこに生えている紫の花と白い花とは、思わず、恐怖にふるえながら、顔を見合つてささやいたのでした。

「なにが起こつたのでしよう。」

「暴風雨がやってきたともちがいますね。」

ここに生えている木や、草たちは、ほんとうに雷鳴と、暴風雨よりほかに怖ろしいものが、この宇宙に存在すること

を知らなかつたのでした。

「やはり、暴風雨でしようね。いまにちようが飛んできたら聞いてみましょう。」

いつも、暮れ方の陽が、斜めにここへ射すころ、淡紅色の小さなちようがどこからともなく飛んできて、花の上へ止まるのでした。花たちは、そのちようのくるのを待っているのであるが、今日にかぎつてちようは、どうしたのか、姿を見せなかつたのです。まったく日が暮れかかると、平原は、静けさをとりもどしました。けれど、四辺には、なまぐさい風が吹いて、月の光は、血を浴びたように赤かつたのでした。先刻二人の兵士が、腹ばいになつて、話をしていた場所から、さらに前方、三百メートル

ぐらい距へだたつたところで、

「小西こにし、小西こにし……。」

こう闇やみの中で友ともの名なを呼よびながら、戦友せんゆうを探さがしているのは、  
 おかだじょうとうへい  
 岡田上等兵おかだじょうとうへいでした。

そのうち、彼かれは、足あしもとに横よこたわっている屍骸しがいにつまずいて危あやうく倒たおれかかったが、踏ふみとどまって、月つきの光ひかりでその顔かおをのぞくと、打うたれたごとく、びっくりして、

「おい、小西こにしじゃないか、やはりやられたのか。」

彼かれは、ひざまずくと、戦友せんゆうの屍かばねを膝ひざの上うえに抱だき上げて、

「おまえのいったことは、やはり虫むしの知しらせだったな。とうとうやられたのか。しかしおれも、思おもうぞんぶん敵かたきを討うつて、すぐ後あと

からいくぞ。今夜こんやだけさびしいだろうが、一人ひとりでここにいてくれ。

明日あすの朝あさは、かならず迎むかえにくるから。」

おかだじょうとうへい  
岡田上等兵は、月光げつこうの下したに立たつて、戦死せんしした友ともに向むかっ

て、合掌がっしょうしました。彼かれは、足あしもとに茂しげつている草花くさばなを手当てあ

たりしだいに手折たおつては、武装ぶそうした戦友せんゆうの体からだの上うへにかけていま

した。そして、味方みかたの陣営じんえいに向むかつて、いきかけたのであるが、

またなにを思おもつたか、引ひき返かえしてきて、戦友せんゆうの腕うでについている

時計とけいのゆるんだねじを巻まきました。彼かれは、指先ゆびさきを動うごかしながら、

「さびしくないように、小西こにし、時計とけいのねじを巻まいておくぞ。今夜こんや

ひと晩ひとばん、この音おとをきいていてくれ……。」

おかだじょうとうへい  
岡田上等兵は、なんといつても答こたえがなく、安やすらかに眠ねむる



友ともの顔かおを見つめて、熱あつい涙なみだをふきながら、しばらく別わかれを惜おしんでいました。

その後ご、彼かれは、かつての約やく束そくを守まもつて、戦せん友ゆうの骨こつ壺つぼを負おい、前ぜん線せんから、また前ぜん線せんへと野のを越こえ、河かわを渡わたつて、進しん撃げきをつづけているのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「新児童文化 第4冊」

1942（昭和17）年5月

※表題は底本では、「戦友《せんゆう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 戦友

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>